

中国狐文化の受容から見る日本人の女性観

潘 蕾*

1. 問題提起

狐は中日両国の実録、神話、物語、詩歌、小説などによく登場するものである。両国の数多くの描かれた狐の中に、若者もあれば年寄りもあり、美しいものもあれば醜いものもあり、善良なものもあれば凶悪なものもある。狐たちがたとえヒーローやヒロインでなくとも、常に異様な光を放っており、さまざまな情報を伝えている。それらの情報はまさに人間社会に対するリアルな描写であり、文化理解におおいに役立つと思われる。

中国では、狐はもともと一部の部族でトーテムとされた動物であったが、漢代から符瑞天命思想の流行を背景に瑞祥の動物と見なされるようになった。ところが、魏晋南北朝時代になると、狐瑞に関する記録が未だに多く確認できる中、妖と化した狐も文学作品などにたくさん登場するようになった。魏晋南北朝時代の狐妖の中に、「胡博士」と「阿紫」が最も個性あふれるものであり、この二者は後に唐代に現れた「任氏」と共に、中国狐妖の三大類型となっている。三類型の中で、後に中国で一番発達したのは「阿紫」型の狐妖である。唐代以後、狐神と狐仙も現れたが、いずれも狐妖ほど発達することはなかった。

一方、七世紀以来の中日両国の盛んな人的交流により、中国の狐文化は日本にも伝わり、遅くとも平安時代末期までにシャーマニズムや道教や仏教文化などと結び付けられた中国の狐文化がす

に日本に伝わったと思われる。日本では、中国から伝入した狐文化の中で、最も発達したのは狐神であり、狐神は稲荷信仰の一環としてすっかり日本社会に定着した。これに対し、狐妖が中国本土ほどの活躍ぶりを見せることはなかった。

文学作品や民族誌などにおいては、上述した中国狐妖の三大類型の中に、「胡博士」型の狐妖は基本的に年寄りの男性に化けて現れるのに対し、「阿紫」型と「任氏」型の狐妖はいつも若くて美しい女性に化けて現れている。このように、中国狐妖の大半は女性に変身でき、そこには人々の人間女性に対する考え方が投影されていると思われる。この意味では、各歴史時期に描かれた女性に変身する狐妖に対する研究は各歴史時期の人間女性に対する研究に資すると言えよう。

宋代以来の中国における「阿紫」型の狐妖の発達について、中国狐文化の研究者である李劍国氏が「それは当時の中国人女性の社会的地位の低下を背景としている」と言及した¹が、中国人女性の社会的地位がどのような歴史の変遷の中で低下し、女性の社会的地位の低下が当時の中国人の如何なる女性観を背景としているかなどの問題について、深く掘り下げてはいない。しかし、筆者から見れば、このような問題の検討なしには中国における「阿紫」型の狐妖が発達する本当の原因を究明することはできない。一方、日本では「阿紫」型狐妖がそれほど発達しなかったことについて、日本狐文化の研究者はあまり触れていない。筆者から見れば、これもやはり日本人女性の社会的地位及びその社会的地位の背景にある日本人の

*北京外国語大学北京日文学研究センター

女性観を手掛かりに検討すべきである。したがって、本稿では、日本における中国狐文化受容の諸相を再検討し、それをもって日本人の女性観の一端を浮き彫りにしてみたいと思う。

2. 中国の狐文化

(1) 狐トートেম

後漢の趙曄の編纂した『呉越春秋』巻六の「越王無余外伝」に夏王朝の始祖である禹が塗山氏の女を娶る話が記されている。つまり、三十になっても未だに独身である禹が塗山というところで一匹の九尾の白狐に出会い、さらに塗山の人々の歌った九尾の白狐の歌を耳にし、塗山で結婚すると決意して、塗山氏の女を妻に迎えたという。この話では、九尾の白狐が塗山氏のトートেমとして描かれている。中国では「狐」が姓氏の一つであり、その代表的な人物として春秋時代の晋国の大夫・狐突（?～紀元前637年）が挙げられ、今日の山西省清徐県に狐突廟が現存している²。狐姓の起源について諸説があるが、狐をトートেমとする部族の名残であるとも推測できよう。

(2) 狐瑞

戦国時代後期以来、符瑞思想が流行した。符瑞とは、めでたいしるしのことであり、古代中国では、これらのしるしは統治者が天命を受ける象徴と見なされた。符瑞はその象徴する政治的意義の大きさに応じて、一般的に大瑞・上瑞・中瑞・下瑞の四段階に分けられるが、中国に現存する最古の行政法典である『唐六典』（738年成立）には148種類の瑞物が記されており、その中に九尾狐・白狐・玄狐が上瑞に、赤狐が中瑞に入っている。このように、狐が瑞物と見なされ、それゆえ、後漢時代の画像石に九尾狐が白兔・蟾蜍・青鳥と共に西王母の周りに描かれているのである。

ほかに、「篝火狐鳴」の話も符瑞思想を利用したものである。『史記』巻四十八の「陳涉世家」によれば、秦末に陳勝と呉広が武装蜂起をし、民

衆を味方につけるためにかがり火をたき、狐の鳴き声を真似させて「大楚が興って陳勝が王となろう」と呉広に言わせたという。このように、遅くとも『史記』の成立した漢代には狐がすでに天命を示す特権を与えられたと思われる。狐を瑞物と見なす考え方は後の北魏時代に全盛期を迎え、李劍国氏の統計によると、『魏書』には太和二（478）年～武定三（545）年までの68年間、九尾の狐が7回、白狐が19回、黒狐が2回、狐が計28回登場し、みな縁起のいいものとして記録されている³。

(3) 狐妖

後漢の許慎の編纂した『説文解字』では、狐は“狐，祿兽也，鬼所乘之，有三德，其色中和，小前大后，死则丘首。”と解釈されている。この解釈から、漢代において、狐が三徳の備える動物として瑞物と見なされる一方、鬼の乗る妖獣とも認識されていたと読み取れる。東晋の歴史家・干宝の編纂した志怪小説集『搜神記』には数多くの狐妖が登場するが、代表的なのは巻十八に描かれる「胡博士」と「阿紫」である。二者は唐代に現れた「任氏」（沈既濟『任氏伝』）と共に、中国狐妖の三大類型となっている。三類型の中で、後に中国で一番発達したのは「阿紫」型の狐妖である。

(4) 狐神

北宋の学者・李昉らが編纂した類書『太平広記』には“唐初以来，百姓多事狐神。房中祭祀以乞恩，食饮与人同之。事者非一主。当时有谚曰：‘无狐魅，不成村。’”という記述があり、この記述は初唐の学者・張鷟の著した筆記小説集『朝野僉載』からの引用である。張鷟の記録するところによれば、唐代の初期にすでに狐神崇拝がある。ただし、狐を祭る行為は民間で一般的に行われていたものの、あくまでも個人的な行為で、祭る狐神も一定しななければ、狐神廟のような共同で祭祀するところもなかったのである。こうした狐神崇拝は後に継承され、元代の脱脱らが編纂した正史『宋史』五行志に“宣和七（1125）年秋，有狐由良岳直入禁中，据御榻而坐，诏毁狐王庙。”とある。この記述から、

宋代に狐神を共同で祭祀する狐神廟が存在し、しかも狐神が狐王と称されるほどの地位に高められたことが確認できる。

(5) 狐仙

清代の学者・紀昀は民間から集めた200近くの狐にまつわる話をその著『閱微草堂筆記』に収め、“人物异类，狐则在人物之间；幽明异路，狐则在幽明之间；仙妖异途，狐则在仙妖之间。”（『閱微草堂筆記』卷十）と記した。紀昀から見れば、狐は人と物、仙と妖の中間にあるものであり、人・仙に近い存在である。狐を仙に近いものと見なす考え方は明代に道教が流行したことを背景にしていると思われる。道教では、宇宙と人生の根源的な不滅の真理である道と一体となる修行のために、鍊丹術を用いて不老不死の靈藥・丹を鍊り、仙人となることを究極の理想とする。つまり、道教における修行は、狐が妖から仙に転じる可能性を提供したのである。

3. 狐妖の化人と性別化

上述した中国の狐文化の諸相の中で、最も発達したのは狐妖である。前述した通り、「胡博士」、「阿紫」、「任氏」は中国狐妖の三大類型であるが、三者とも人間に化けることができる。狐妖の化人について、『太平広記』所引の晋・郭璞の著した『玄中記』には以下のような記述がある。

“狐五十岁，能变化为妇人。百岁为美女，为神巫，或为丈夫与女人交接，能知千里外事，善蛊魅，使人迷惑失智。千岁即与天通，为天狐。”

すなわち、狐は50年生きると女に変身でき、100年生きると美女や巫女或いは男に変身でき、遠くで起きていることが分かるようになる。さらに、1000年生きると天狐という狐の最高位につくことができるという。このように、郭璞の解釈では、狐が人間に化ける際、生きる年数によって男性か女性になったのである。

阿紫の話として、『搜神記』卷十八に“后汉建

安中，沛国郡陈羨为西海都尉，其部曲王灵孝无故逃去。羨欲杀之。居无何，孝复逃走。羨久不见，囚其妇，妇以实对。羨曰：“是必魅将去，当求之。”因将步骑数十，领猎犬，周旋于城外求索。果见孝于空冢中。闻人犬声，怪遂避去。羨使人扶孝以归，其形颇象狐矣。略不复与人相应，但啼呼“阿紫。”阿紫，狐字也。后十余日，乃稍稍了悟。云：“狐始来时，于屋曲角鸡栖间，作好妇形，自称阿紫，招我。如此非一。忽然便随去，即为妻，暮辄与共还其家。遇狗不觉云。乐无比也。”道士云：“此山魅也。”とある。ここでは阿紫は男性を誘惑する容姿端麗の淫らな若い女性に化けている。

胡博士の話は同じく『搜神記』卷十八に記されており、“吴中有一书生，皓首，称胡博士，教授诸生。忽复不见。九月初九日，士人相与登山游观，闻讲书声。命仆寻之，见空冢中，群狐罗列，见人即走。老狐独不去，乃是皓首书生。”とある。ここでは胡博士は学問を教授する白髪の老年男性に化けている。

また、任氏について、『任氏传』は“任氏，女妖也。（略）嗟乎，异物之情也有人道！遇暴不失节，徇人以至死，虽今妇人，有不如者矣。”と記している。ここでは任氏は自由奔放でありながらも、貞節を守り、愛する人のために命も惜しまない美しく若い女性に化けている。

全体から見れば、文学作品や民族誌などに登場する狐妖の中に、人間に化ける際、女性に化けるケースが多いのである。

4. 女性に化ける狐妖が頻出する歴史的背景

狐妖と女性の結合について、吉野裕子氏は陰陽五行説では狐が陰気の獣とされたことを指摘された⁴。女性に化ける狐妖の歴史と中国女性史の研究結果とを照らし合わせてみれば、「阿紫」型狐妖と「任氏」型狐妖の発生・発展は中国人の女性観の変遷に対応するものであると言えよう。

商代の貴族女性は比較的高い政治的地位を持ち、

尊敬されていた。

周代に入ると、父権制が確立される中、女性が政治から排除され、家内部における妻・母としての役割が強調されるようになった。周と殷との決戦の前に作られた『尚書』牧誓には「牝鸡无晨。牝鸡之晨，惟家之索。」とあり、女性の政治への関与を強く批判したのがその現れである。

漢代になると、儒家の学説が中国思想の主流となり、三代滅亡の原因を探求する儒学者たちが陰陽五行説をも利用して女性と興国・亡国の関連性を提起した。前漢の司馬遷が著した『史記』卷四十九の「外戚世家」序文に「自古受命帝王及继体守文之君，非独内德茂也，盖亦有外戚之助焉。夏之兴也以涂山，而桀之放也以末喜。殷之兴也以有娥，纣之杀也嬖妲己。周之兴也以姜原及大任，而幽王之禽也淫于褒姒。」とある。司馬遷のこうした女性観が劉向に継承され、後漢・班固の編纂した『漢書』卷三十六の「楚元王伝附劉向伝」に「向睹俗弥奢淫，而赵、卫之属起微贱，逾礼制。向以为王教由内及外，自近者始。故采取《诗》《书》所载贤妃贞妇，兴国显家可法则，及孽嬖乱亡者，序次为《列女传》，凡八篇，以戒天子。」と、劉向が「列女伝」を編纂した意図が明記されている。また、漢代に女性の品行の良し悪しを判じ定め、女性の守るべき道徳を説く著作も数多く世に出され、後漢・班昭の『女誡』はその代表作である。漢代の人々のこうした女性観が悪妻・阿紫と良妻・任氏が登場する土壌を供したと言えよう。

魏晋南北朝という動乱の時代にあたり、儒学に代わって西方から伝わった仏教と民間から発展した道教が盛んになった。仏教が中国に伝入したのは一世紀頃であり、当時主流であった儒学の女性観の影響のもと、初期仏教や大乘仏教には見られなくて上座部仏教の時代に修行僧によって作り出された女性差別が漢訳仏教に取り入れられたのである。『妙法蓮華経』提婆達多品第十二に「又女人身，犹有五障，一者不得作梵天王，二者帝释，三者魔王，四者转轮圣王，五者佛身。」とあり、

女性の持つ五種の障礙を説いている。このような女性観は、男性より劣る女性が男性を誘惑してその精気を吸い取るという「阿紫」型の狐妖の出現を促したと考えられる。

唐王朝は老子を宗室の祖と仰ぎ、宮中での道教の席次を仏教の上に置いた。道教の源流は母系氏族社会の宗教伝統まで溯ることができ、女性崇拜がその一大特徴である。不老長生を求めて仙人となることを究極の理想とする道教は、西王母を中心に歴大な女仙の系譜を作り出した。そんな中、唐代前期の女性は儒学のいう三従四徳に束縛されることが少なく、政治の場においても活躍した。こうした女性観が自由奔放な「任氏」型の狐妖の出現を促したと思われる。

しかし、武韋の禍と安史の乱を経た唐王朝では、女性の政治への関与が強く批判された。また、唐代中期に全盛を迎えた密教では、奪精鬼として閻魔天の眷属となっている女神・吒枳尼がしばしば「狐魅」と称された。これらを背景に、男性を誘惑して政治に関与する女性を「狐媚」と称することが急増した。初唐の詩人・駱賓王が則天武后に反抗した將軍・徐敬業の秘書として書いた檄文『為徐敬業討武墨檄』で「掩袖工諛，狐媚偏能惑主。」と、則天武后のことを「狐媚」と称している。また、中唐の詩人・白居易がその詩『古塚狐』で「古塚狐，妖且老，化为妇人颜色好。」「狐假女妖害犹浅，一朝一夕迷人眼。女为狐媚害即深，日长月增溺人心。何况褒姒之色善蛊惑，能丧人家覆人国」と綴っている。このように、男性を誘惑して政治の乱れをもたらすことが「阿紫」型狐妖に加味されたのである。

宋代以降、儒学思想が強化され、女性の政治への関与を禍のもとと見なす「女禍論」が一般化した。北宋の歐陽脩らが編纂した『新唐書』の卷五「睿宗玄宗本紀」に「自高祖至于中宗，数十年间，再罹女祸，唐祚既絶而復续。中宗不免其身，韦氏遂以灭族。玄宗亲平其乱，可以鉴矣，而又败以女子。」とあり、「女禍」という言葉が初めて政治権

力の中枢にあった則天武后・韋皇后・楊貴妃に使われたのである。そんな中、女性は儒学の倫理規範によって厳しく規制され、特に貞操を厳守することが強く要求されるようになった。このような女性観は男性を誘惑して政治の乱れをもたらす「阿紫」型の狐妖と夫のために貞節を守る「任氏」型の狐妖両方の発展を促したと思われる。

後世に発展した「阿紫」型の狐妖の代表として、明代に成立した神怪小説『封神演義』に登場する妲己が挙げられるが、この作品には商が滅亡した原因は紂王にあるのではなく、紂王に寵愛された妲己にあるという歴史観が全面的に出ている。一方、発展した「任氏」型の狐妖の代表として、清代に成立した短編小説集『聊齋志異』に登場する青鳳、嬰寧、蓮香などが挙げられる。

5. 日本における中国狐文化の受容

七世紀以来の中日両国の盛んな人的交流により、中国の狐文化は日本にも伝わり、遅くとも平安時代末期までにシャーマニズムや道教や仏教文化などと結び付けられた中国の狐文化がすでに日本に伝わったと思われる。

(1) 狐瑞

平安時代初期に編纂された勅撰歴史書『続日本紀』に狐はしばしば貢物として登場する。『続日本紀』和銅五(712)年九月条に「詔曰。朕聞。旧老相伝云。子年者穀実不宜。而天地垂祐。今茲大稔。古賢王有言。祥瑞之美、無以加豊年。況復、伊賀国司阿直敬等所献黒狐。即合上瑞。其文云。王者治、致太平。則見。思与衆庶共此歡慶。宜大赦天下。」とあり、黒狐を上瑞とする書き方は前に触れた中国の『魏書』の書き方と類似している。

(2) 狐神

日本では、中国から伝入した狐文化の中で、最も発達したのは狐神であり、狐神が稲荷信仰の一環としてすっかり日本社会に定着した。稲荷信仰とは、稲荷神社の主祭神として祀られるお稲荷・

宇迦之御魂神(五穀と蚕桑を司る穀霊神)への信仰のことである。岡田米夫氏の統計によれば、日本全国には稲荷神社が約32000社あり⁵⁾、神社総数の三分の一をも占めている。お稲荷は元々天長四(827)年に淳和天皇より「従五位下」を授かったが、後に徐々に上進してついに天慶五(942)年に神様の位として最高位の「正一位」になったのである。稲荷神社の前によく狐の像が置かれることから、狐をお稲荷と勘違いする人が多いが、狐はお稲荷そのものではなく、お稲荷の神徳を人間に伝えて人間の願い事をお稲荷に伝える使いなのである。日本で最も信仰されているお稲荷の使いとして、狐神は中国では考えられない脚光を浴びたのである。なお、稲荷信仰は神道系の稲荷信仰、仏教系の稲荷信仰、民俗系の稲荷信仰に分けられる⁶⁾が、仏教系の稲荷神社の中に、豊川稲荷の本尊である「吒枳尼天」と最上稲荷の本尊である「最上位経王大菩薩」は共に白狐にまたがる天女の姿をしている。仏教の女神・荼枳尼と神道の稲荷神が習合したものである。

(3) 狐妖

「狐が女性に化ける」という公式は遅くとも平安時代中期に日本に伝わったと考えられる。平安時代中期の学者・源順が編纂した『倭名類聚抄』二十巻本では、狐が以下のように解釈されている。

「狐 考聲切韻云。狐[音胡和名岐豆禰]。獸名射干也。關中呼爲野干。語訛也。孫面切韻曰。狐能爲妖怪。至百歳化爲女也。」

この解釈では、作者が唐代の孫愐の説をとって狐が100歳になって女に化けるといふ。前掲した晋・郭璞の『玄中記』に見られる狐が50歳になって女に化けるといふ解釈とやや異なるが、長生きする狐が女に化ける点では一致している。

一方、「阿紫」型の狐妖と「任氏」型の狐妖は遅くとも平安時代後期に日本に伝わったと思われる。平安時代後期の学者・大江匡房は狐に関する怪奇談を集めて晩年に『狐媚記』を著したが、作品の最後で以下のように記している。

「嗟呼，狐媚變異，多載史籍。殷之妲己為九尾狐，任氏為人妻。到於馬嵬，為犬被獲。惑破鄭生業，或讀古冢書，或為紫衣公，到縣許其女屍，事在侷儻，未必信伏。今於我朝，正見其妖。雖及季葉，恠異如古。偉哉。」

以上の記述から、十二世紀までに中国の各種の狐妖伝説がすでに日本に伝わったと読み取れる。日本のさまざまな狐妖伝説は中国の狐妖伝説をもとにして発展したものであると思われる。

女性に化ける狐妖を見ると、平安時代後期に成立した説話集『今昔物語集』の巻二十七第四十一の「高陽川の狐女と変じて馬の尻に乗りし語」に登場する狐女は「阿紫」型の狐妖の要素を取り入れたものである。この狐女は男性を騙す容姿端麗の若い女性という点では阿紫と変わりはない。ただし、狐女は人間を騙すが、人間を害することはない。しかも、退治された後、再び人間を騙すこともない。つまり、阿紫のような徹底的に批判される対象として描かれていないのである。

これに比べ、室町時代以来の玉藻前の伝説はより中国の「阿紫」型の狐妖に近づけたものであると言えよう。この伝説では、白面金毛九尾の狐妖はまず中国で妲己に変身し、商の滅亡をもたらした。その後、天竺に渡って耶竭陀国の班足太子の妃・華陽夫人に変身し、暴虐の限りを尽くした。再び中国に戻った狐妖が周の幽王の后・褒姒に変身し、周の滅亡をもたらした。八世紀になると、狐妖が遣唐使の船に乗って日本に渡ったが、平安後期に玉藻前に変身し、その美貌と博識から鳥羽上皇に寵愛された。しかし、上皇は次第に病に伏せるようになり、陰陽師に正体を見破られた狐妖が殺されて殺生石となった。その後も毒気を撒き散らして悪行を繰り返したが、ついに玄翁和尚によって打ち砕かれたという。この伝説では、白面金毛九尾の狐妖が徹底的に批判される対象となっている。とは言え、日本の狐文化を概観すると、このような徹底的に批判されて排除される狐妖は決して多いとは言えないのである。

一方、「任氏」型の狐妖も日本で発展した。平安時代初期に成立した仏教説話集『日本霊異記』の上巻第二話の「狐を妻として子を生ましめし縁」を見ると、女性に化けた狐妖が人間男性と結婚して子を儲けたが、正体がばれて野に帰ってしまい、残された子は美濃国の狐の直という氏族の祖となったのである。こうした美濃狐の話から発展したのは江戸時代の歌舞伎『蘆屋道満大内鑑』などに登場する葛の葉の話である。この話では、信太の森の白狐が葛の葉に化けて安部保名と契って一子・晴明を儲けたが、正体を知られて「恋しくば 尋ね来て見よ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉」という歌を残して古巣に帰ったという。美濃狐と葛の葉の話に共通しているのは、正体がばれた後犬に噛まれて死ぬのではなく、夫・子と別れて古巣に戻ったというところである。この要素は中国の「任氏」型の狐妖にはあまり見られないものであり、日本人の狐妖に対する柔軟な態度をある程度窺い知ることができよう。なお、堅く貞節を守るという要素はあまり日本の「任氏」型の狐妖には取り入れられていないのである。

6. 中国狐文化の受容から見る日本人の女性観

中国では宋代以降、儒学思想が強化され、女性の政治への関与を禍のもとと見なす考え方が一般化し、商の紂王の后である妲己が「女禍」の典型とされた。前に日本の室町時代以来の玉藻前の伝説を述べたが、この伝説は時代の発展に伴って徐々に加味されたものであり、江戸時代を経て玉藻前が日本中に知れ渡る狐妖となったのである。この伝説では、国を覆るまでにはいかないが、鳥羽上皇に寵愛された玉藻前は禍のもととして描かれ、中国の「女禍」論の影響のもと成立した話と考えられる。しかも、中国の「女禍」の典型とされる妲己と褒姒の話のほかに、インドの傾国の美女として知られる華陽夫人の話も取り入れ、「阿紫」型の狐妖をより一層発展させたと言えよう。

玉藻前の原型について、讓位した鳥羽天皇に深く愛された皇后・美福門院・藤原得子に比定されることが多い。藤原氏北家の末茂流から出た彼女は、非摂関家出身の皇后として自分から生まれた子が皇位につくように企て、摂関家出身の中宮・藤原璋子を失勢させ、崇徳上皇と藤原忠実・頼長父子との対立を促し、その対立が後に保元の乱に発展した。保元の乱は武士の政界進出の大きなきっかけとされていることから、日本の政界に大きな「地震」をもたらした謀略家の得子がまさに中国の「女禍」論に合致する人物であろう。

女性を禍のもとと見なす考え方の出現は日本人の女性観の変化を背景としていると思われる。周の時代に父権制社会が確立した中国とは異なり、古代の日本社会においては、男性が自分の邸宅に妻を迎えるのではなく、妻の邸宅に自ら出向いてそこで結婚生活を営むという形をとるのが一般的であった。こうした婚姻形態のもとで、子供の出生や養育が妻方で行われることが多く、財産も女性によって継承されていた。それゆえ、当時の女性は相対的に高い社会的地位を保持していたと思われる。平安後期に成立した『今昔物語集』に登場する狐妖は若い女性に化けて人間を騙すが、人間を害することはない。しかも、退治された後、再び人間を騙すこともない。このように、女性に化けて馬の尻に乗せてもらう高陽川の狐妖は「阿紫」型の狐妖の要素を持ちながらも、男性を誘惑する存在として徹底的に批判される対象とはなっていない。当時の日本人の女性観の一端を反映していると言えよう。しかし、室町時代になると、古代以来の婚姻形態は武士の間で崩れ始め、女性の財産継承権が奪われ、このことは女性の社会的地位の低下をもたらすこととなった。さらに、江戸時代に入ってから、嫁入婚の普及に伴い、男尊女卑の図式が正式に確立されるようになった。「阿紫」型の狐妖である玉藻前の伝説が室町時代に発生し、江戸時代に大成することの背景はここにあると言えよう。

一方、平安初期に成立した仏教説話集に現れた「任氏」型の狐妖の話は江戸時代になると、葛の葉の話として大成した。江戸時代は儒学の発達した時代でもあり、女性は儒学の倫理規範によって厳しく規制され、妻・母としての役割が強調された。葛の葉はその当時の日本の女性の理想像として描き出されたものでもあると言えよう。

註

- 1 李剑国 (2002)《中国狐文化》人民文学出版社p.72、pp.108-110、pp.154-155。
- 2 王永峰・李富华“从山西清徐狐突庙看中国民间信仰的变迁”(《山西大同大学学报(社会科学版)》2012年4月(第26卷第2期))
- 3 李剑国 (2002)《中国狐文化》人民文学出版社pp.51-53。
- 4 吉野裕子 (1980)『狐』法政大学出版局。
- 5 大森恵子 (2011)『稲荷信仰の世界——稲荷祭と神仏習合』慶友社。
- 6 岡田米夫 (1966)『全国神社祭神御神徳記』神社新報社。

参考文献

- 李剑国 (2002)《中国狐文化》人民文学出版社
 淑丽 (2008)《先秦汉魏晋妇女观与文学中的女性》学苑出版社
 岳齐琼 (2009)《汉唐道教修炼方式与道教女性观之变化研究》四川出版集团巴蜀书社
 (美)康笑菲 / 著・姚政志 / 译 (2011)《说狐》浙江大学出版社
 邓小南・王政・游鉴明 / 主编 (2011)《中国妇女史读本》北京大学出版社
 吴从祥 (2013)《汉代女性礼教研究》齐鲁书社
 吉野裕子 (1980)『狐』法政大学出版局
 松前健 / 編 (1988)『稲荷明神』筑摩書房
 アジア女性史国際シンポジウム実行委員会 / 編 (1997)『アジア女性史——比較史の試み』明石書店
 中村禎里 (2001)『狐の日本史 古代 中世篇』日本エディタースクール出版部
 西村汎子 (2002)『古代・中世の家族と女性』吉川弘文館
 中村禎里 (2003)『狐の日本史 近世・近代篇』日本エディタースクール出版部
 勝浦令子 (2003)『古代・中世の女性と仏教』山川出版社

- 大森惠子 (2011) 『稻荷信仰の世界——稻荷祭と神仏習合』 慶友社
- 高华·黄超 “从印度古代文化看早期汉译佛经中妇女观和禁欲观的变异——兼论中国早期菩萨像男性化的原因” (《史学月刊》1995年第4期)
- 乔莹洁 “《狐媚记》与中国文化” (《解放军外国语学院学报》2001年7月(第24卷第4期))
- 彭华 “佛教与儒家在女性观上的相互影响与融合” (《哲学动态》2008年第9期)
- 郭竞芳 “《任氏传》中妇女形象的意义” (《殷都学刊》2009年第1期)
- (新加坡) 庄兴亮 “北宋中叶史臣对于“女祸”的看法——以《新唐书》“永徽六年事件”为例” (《宋史研究论丛》2011年00期)
- 林紫秋 “论妲己妖魔形象的形成” (《四川民族学院学报》2011年6月(第20卷第3期))
- 王永峰·李富华 “从山西清徐狐突庙看中国民间信仰的变迁” (《山西大同大学学报(社会科学版)》2012年4月(第26卷第2期))